

資料

日本に現存するゲーテ書簡

—調査報告と再発見—

石原あえか

1. 調査に至る経緯 現在刊行中の『ゲーテ書簡集』との連携

ゲーテ研究に携わる者にとって、「今なお定評のある、完全なゲーテ全集」と言えば、全143巻（1987年刊行の別冊を加えると計144巻）のいわゆる「髭文字Fraktur」で書かれた『ヴァイマル版ゲーテ全集』（略称WA）¹がまず想起される。「ゾフィー版」の別名は、このボリュームある全集が、直孫ヴァルター・フォン・ゲーテ（Walter Wolfgang von Goethe, 1818-85）の遺言により、彼の偉大な祖父ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）の文学的遺産を託されたヴァイマル大公妃ゾフィー（Großherzogin Sophie von Sachsen-Weimar-Eisenach, 1824-97）が1885年にこの全集の編纂を命じたことに由来する。30年以上かけて編纂されたI. 文学作品、II. 自然科学関係著作、III. 日記、IV. 書簡の4部構成の『ヴァイマル版ゲーテ全集』は、1919年にひとまず完成をみた。しかし20世紀半ばになると、早くもWAに代わる新しい全集の必要性が意識され、特に自然科学関連の著作については、『レオポルディーナ版ゲーテ自然科学著作全集』（略称LA）²の刊行が、1947年から始まった（約70年後の2011年に完結）。ゲーテの日記と書簡については、旧東独時代のヴァイマルで1960年代に時系列に沿った目録の整備が進行していたが、本格的かつ大規模な編纂作業はドイツ統一後を待たなければならなかった。

ヴァイマル古典主義研究財団（かつての名称は Stiftung Weimarer Klassik, 現Klassik Stiftung Weimar）傘下のゲーテ＝シラー文書館（Goethe- und Schiller-Archiv 略称GSA）では、1998年からまずWAの第III部、15巻計16冊という比較的冊数の少ない「日記」の改訂・編纂に着手した。そもそもゲーテの日記は、GSAにまとめて保管されているので、「地の利」を活かした当然の選択と言えよう。

他方、WA第IV部の「書簡」は、1887～1912年の間に編纂作業が行われ、WAの3分の1を占める94～143巻の計

50巻に約13,400通が収録されている。しかしWA刊行後も、ゲーテの直筆書簡発見の報告は国際ゲーテ協会発行の『ゲーテ年鑑 *Goethe-Jahrbuch*』などでコンスタントに続いている。第二次世界大戦中、疎開させても運悪く焼失した書簡群がある一方で、1990年までにWA未収録書簡が1,000通ほど確認されていた。同じ1990年にはパウル・ラーベによりWA第IV部補巻（51～53巻の計3巻）が編集・刊行されたが³、すべてを網羅できたわけではない。さらにその後もオークション出品やドイツ国内外の図書館・文書館に向けたアンケートにより存在が新たに確認されたものも含めて、500通を超えるゲーテ書簡の再発見が続いた。他方、個人所蔵のゲーテ書簡コレクションが、コレクターの逝去あるいは相続等の理由により散逸したケースも少なくない⁴。

またGSAが所蔵するゲーテ関係書簡は、約20,000通と群を抜いているものの、実はそのうちのおよそ3分の1、約7,000通は清書前の「草案・下書き」や大事な手紙の「複製・控え」であって、真の意味でのオリジナル、すなわちゲーテの直筆書簡ではない。そしてヴァイマルからゲーテが書き送った書簡は、当然のことながら、世界中に拡散している。ドイツ国内ではGSAに次いで、フランクフルトのゲーテ博物館（ゲーテ生家 *Freies Deutsches Hochstift* 略称FDH）が約800通、デュッセルドルフのゲーテ博物館が約350通、ライプツィヒ大学附属図書館が約330通と続く。そして約200通がヨーロッパだけでなく、アメリカ、アジアに拡散・所蔵されている。GSAを筆頭に15,000通のゲーテ書簡オリジナルが現存するだけでなく、それへの返信を含むゲーテ宛書簡も約21,000通の現存が確認されている。なお、後者のゲーテ宛書簡のうち約8,000通は、特定人物との往復書簡——たとえば『ミュンヘン版ゲーテ全集』⁵（略称MA）には文壇の好敵手だったシラー（Friedrich Schiller, 1759-1805）との往復書簡（計2巻）やゲーテにしては稀な「君・お前」の親称で呼び合う親友でベルリン在住の音楽指南役ツェルター（Carl Friedrich Zelter, 1758-

1832)との往復書簡(計3巻)が入っている——の形ですでに印刷・刊行済みである。

そしてWAの第IV部「書簡」の続編および補足改訂として、2008年からGSAより新しい歴史的批判版『ゲーテ書簡全集 *Johann Wolfgang Goethe, Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*』の刊行が始まった。本文と注釈の2冊で1巻を構成、完成すれば計38巻になる予定である⁶。

もっともこれだけの大規模な編纂プロジェクトが突然始まったわけではない。新シリーズ刊行の準備段階として、「ゲーテ書簡目録 *Repertorium der Goethe-Briefe*」(以下、*Repertorium*と略す)のデータベースが構築され、世界約200か所に散在するゲーテ書簡の位置情報を網羅している⁷。日本については、2022年1月まで、関東では永青文庫、関西では天理大学附属天理図書館と京都外国語大学付属図書館の計3か所が登録されていた。

2. 日本国内のゲーテ書簡を辿って 起点となった東京大学総合図書館

このたび日本に現存するゲーテ書簡の調査を思い立ったきっかけは、2022年1月半ば、前年末に地図史料関係の調査でお世話になった東京大学総合図書館(本郷)の貴重図書担当・中村美里氏から届いた一通のメールだった。「総合図書館の貴重図書にゲーテの書簡が所蔵されている」という内容の短い文に、OPAC請求番号「A100:2070」のURLが添えられていた。「担当2年目になるまで、こんな資料があるとは知らず…」と謙遜されつつ、デジタル化のご相談が主旨だった。しかしメールを受け取った筆者自身は、当該資料の存在をこれまで耳にしたことすらない。半信半疑でOPACを確認した書誌情報は以下の通りだった。

出版者	Weimar
出版年	1822
大きさ	1 leaf; 25×21 cm. folded to 7×11 cm
一般注記	Holograph signed In German
著者標目	Goethe, Johann Wolfgang von, 1749-1832
本文言語	ドイツ語

さらに表題は[Letter] 1822 De[zem]ber 29, Weimar [to L. W. Cramer]とある。手許のWAを照合すると、「1822年12月28日付クラマー宛書簡の原案」が載っている。となると、もしか、この正本オリジナルということか? *Repertorium*のWA-Nr. 36203の情報を呼び出すと

Ausfertigung: von Schreiberhand (John), mit egh. Schlußformel, mit egh. Unterschrift, Ort und Datum von Schreiberhand, {Angaben nach Faksimile}

とあった。つまり「末尾のサインだけがゲーテの自署」で、それ以外はすべて、ゲーテに仕えたヨン(Johann August Friedrich John 1794-1854)の筆跡である。続く「オリジナル書簡・正本 *Handschrift*」の所在を意味する「H:」の後は空欄、「所在不明」を意味していた。同日夜には前述の『歴史的批判版ゲーテ書簡集』編纂責任者のひとりでGSAの専門研究員エックレ博士(Frau Dr. Jutta Eckle)にメールで当該書簡の所在を尋ねたところ、「1995年にオークションにかけられたが、誰が落札し、どこにあるか行方不明」と即答があった。詳しい情報は以下の通り。1822年12月28日にヴァイマルでゲーテが返信案を彼の秘書ヨンと作成、翌29日付でヨンが清書した正本にゲーテが署名し、ヴェツラー在住の法律家兼鉱物学者のクラマー(Ludwig Wilhelm Cramer, 1755-1832)に発送した。返信案(Concept: 所謂「下書き兼コピー」)はGSAが所蔵する。この初出、すなわち本書簡が最初に印刷されたのは、プラトラネックが編纂した『ゲーテと自然科学者たちとの書簡集 *Goethe's Naturwissenschaftliche Correspondenz 1812-1832*』の第1巻(1874年刊)に遡る⁸。ただし返信草案に依拠したため、日付は正本より1日前の28日付が使われた。1907年、WA(IV-36, S. 249)への転載時をもって28日付になっている。ところが1985年にStargardtのオークション・カタログに正本が登場、さらにその10年後の1995年、ふたたびHauswedell & Nolteのオークション・カタログにファクシミリ付で正本が掲載された。

「実は正本を本務校図書館が持っているらしい」とメールを返すと、すぐに「確認してくれ」との依頼があった。これが4半世紀消息不明だったゲーテ書簡が「再(々)発見」された瞬間だった。2022年1月14日以降、*Repertorium*の「H:」の後に「手稿は東京にある模様、調査依頼中」との注が加えられた。

それから1週間後、本郷キャンパス・総合図書館の貴重図書閲覧室で当該書簡を調査した。GSAで見慣れたヨンの端正な筆跡の最後に、それとは明らかに異なる、骨太のゲーテの自筆署名があった。ウォーターマーク(水紋)の確認も容易だったが、幸いオリジナル鑑定書も付いていて、これまた偶然、見覚えのある筆跡の鑑定者は、元デュッセルドルフ・ゲーテ博物館館長兼デュッセルドルフ大学教授のハンゼン(Herr Prof. Dr. Volkmar Hansen)氏だった。デュッセルドルフのゲーテ博物館のロゴ入り便箋、1996年9月6日付の鑑定書には、「ゲーテが鉱物学者ルートヴィヒ・ヴィルヘルム・クラマーに宛てた書簡、結語と署名がゲーテ自筆」とあり、さらに「ゾフィー版が前日の草案であるのに対し、本状は1822年12月29日付の清書正本である」と明記されていた。WA掲載の草案と比べると、結語とサインのゲーテの自筆部分の有無はもちろん、5行目のGegenwärtigesが正本では小文字始まりの

務した。おそらく昆虫学への関心から渡独し、1958年1月から、チュービンゲン大学で動物学を学ぶ。翌年の冬学期からはヴェルツブルク大学に移って生物学を専攻し、90頁強のドイツ語学位請求論文「形態学的に一致するケラ（蝸蛄：バッタ目もしくは直翅目）の頭頸部領域の分析 報告 その2・中枢神経系を考慮した頭部骨格の実験的系統的知見 *Analyse der Kopf-Hals-Region von Tachycines (Saltatoria) in morphogenetische Einheiten: II. Mitteilung: Experimentell-teratologische Befunde am Kopfskelett mit Berücks. des zentralen Nervensystems*」により、1964年6月、同大学から自然科学の博士号を得た。ちなみにバッタ目を対象にした本論文は、二部構成の後半に相当する。前半その1にあたる「羽化直前および架空の正常な状態における解剖学的所見 *I. Mitteilung: Anatomische Befunde im schlüpfreifen und im imaginalen Normalzustand*」とともに、いずれも1966年刊行の『動物学年鑑』第83巻「動物解剖学と個体発生」部門に掲載・刊行されている。

学位取得後、寄贈者・和田氏はデュッセルドルフ大学附属動物学研究所にまずドイツ研究振興協会（DFG）の研究助手として職を得、その後、同研究所の正規研究員となり、さらに臨海実験所の研究・指導も兼務し、同大学の生物学および医学部学生への実習等を他の研究同僚と担当された。和田氏はヴェルツブルクで知り合ったドイツ人女性を配偶者とされたそうだが、お連れ合いの名前は履歴書に記載されていなかった。

話は戻って、氏の論文題目にもある「形態学 Morphologie」と言えば、「色彩学 Farbenlehre」と並んで、ゲーテが始祖と言える研究領域である。ゲーテ自身も当然、芋虫が蛹を経て蝶になる羽化をはじめ、昆虫の変態にも興味を抱いて観察研究を行ったことは、LA収録の自然科学論文集からも確認できる。おそらく和田氏は、自身の形態学研究への関心もあり、当該ゲーテ書簡を購入されたのではなかろうか。購入日は1996年9月6日、デュッセルドルフ市内デュイスブルク通りにある「ゲーテ書店 Goethe-Buchhandlung」で9,500ドイツマルクを支払った領収書が残る。それから6年経った2002年12月6日、短い闘病の末、デュッセルドルフで永眠された。

実は和田氏は、長年勤めたデュッセルドルフ大学附属図書館にダーウィンの直筆書簡を遺言により寄贈している。20世紀半ばに昆虫学を志して渡独した日本人研究者とゲーテの接点をもう少し詳しく知りたく、書簡鑑定を務めた同大学独文学名誉教授でもあるハンゼン氏に、「何かご存じないか」とメールで問い合わせたが、「だいぶ前のことで、残念ながら記憶がない」との返信だった。また寄贈当時、総合図書館館長からの感謝状を送付した住所を手掛かりに、庄野氏とコンタクトを試みたが、20年近い月日が経ってしまい、残念ながら連絡がつかなかった。以上が本学所

蔵のゲーテ書簡——正確にはゲーテの自署付き書簡——の由来である。

3. 関西の所蔵館（1） 天理図書館

GSA が存在を把握できなかった「東大・本郷」がこれまで Repertorium の地図上に記載されていなかったのは当然であるとして、改めて所在分布を確認すると、日本国内は東京・奈良・京都の計3館で、さほど数も多くない。折しも2020年春以降は、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により海外渡航もままならない時期だったので、ドイツで書簡編纂に従事する同僚たちのためにも、日本の国内調査・確認を引き受けることにした。

本節では、まず天理大学附属天理図書館ご所蔵の2点について報告する。筆者の閲覧問い合わせに対して、天理図書館貴重書室からは、「ペン書き資料は、資料の保存上、閲覧不可」との返信があった。ゲーテ自身は、当時最先端の〈鉛筆〉の扱いやすさを気に入り、原稿校正やメモ書きなどに活用していたが、書簡であれば当然ペン書きになる。残念ながら直接の調査・確認は断念せざるを得なかったが、担当者のご協力により得られた資料情報について、以下、まとめておく。

まず、『天理図書館稀書目録 洋書之部 第一』⁹の377番（請求記号: 283-イ2-6）と378番（請求記号: 283-イ2-7）にゲーテ書簡として計2点の掲載がある。ただし377番¹⁰の「ルイーゼ公妃¹¹宛」は中身の書簡は失われ、「2か所封蝋を施した封筒のみ」とのこと。ドイツ側の資料には、さらにリーマーの筆跡で「1827年12月、ゲーテの手稿」というメモ書きがある、という¹²。しかしこれは原本調査になってしまうため、前述の通り、確認できなかった。続いて目録378番は、WAの第IV部第19巻312頁以降に Nr. 5355として刊行済みのアイヒシュテット（Heinrich Carl Abraham Eichstädt, 1772-1848）宛書簡である。その後、1897年に List & Francke Nr. 350/1 のオークション・カタログにも掲載されたが、日本語では雑誌『陽気』に「やまとの名品 天理図書館」として、カラー写真付きの紹介記事が公開されている¹³。執筆者である天理図書館・福田由紀子氏の同紹介文によれば、当該書簡は縦22.5cm、横19cm。ウォーターマークの有無については触れられていない。1807年4月26日付で、ヴァイマルの隣町、イエーナ大学（現正式名称フリードリッヒ・シラー大学イエーナ、略称FSU）教授アイヒシュテットに宛てたもの。受取人のアイヒシュテットは、1797年にライプツィヒ大学からイエーナ大学に移籍し、1804年からは上級図書館員も兼任、また同じ1804年からは『イエーナ一般文芸新聞 *Jenaischen Allgemeinen Literaturzeitung*（略称J. A. L.）』の編集長を務めた。J. A. L. は1785年にヴァイマルの出版・印刷業者ベルトゥフ（Friedrich

Justin Bertuch, 1747-1822) の協力を得て、法学者ゴットリープ・フーフエラント (Gottlieb Hufeland, 1760-1817) と言語学者のクリストフ・ゴットフリート・シュッツ (Christoph Gottfried Schütz, 1747-1832) のふたり、いずれもイエーナ大学教授が中心となって創刊した書評紙『イエーナ教養新聞 *Jenaer gelehrter Zeitung*』の後継紙にあたる。『イエーナ教養新聞』は刷部数2,000を誇る当時としては異例の商業的成功をおさめたが、1803年に主要編集者が他大学に次々と移籍し、また対象読者を知識人・専門研究者に絞ったこともあり、存続の危機に遭った。書評紙がイエーナ大学に不可欠なメディアと心得たゲーテが、アイヒシュテットを編集長とし、フォーマットを変えずに刊行続行に尽力した経緯がある。この手紙も J. A. L. 編集業務に関するやりとりが主体で、以下、全文の拙訳になる。

拝啓 しばらく前から原稿数点をお届けしたく、また未完成の幾つかはまだ手元にありますが…。まずは同封した岩石切片に関する短報を貴紙に掲載していただければ幸いに存じます。

それから、うろ覚えのタイトルで、『ホーエンローエ公進軍についての一証人の手記』とかいう書籍について、別途お尋ねがあります。この書籍の評者がまだお決まりでなければ、引き受けてくれそうな方の心当たりがございます。ご一報いただければ、私から必要な対応をします。

また複数同封した手紙を、お手数ですが、各宛先に配布して下さいませよう。

貴殿のご健勝をお祈り申し上げます。 敬具

ヴァイマル、1807年4月26日 ゲーテ

追伸・ルドルフィの旅行記の書評担当者は誰ですか？

この書簡の口述筆記・清書を担当した書記はリーマーで、画像データを最大限拡大しても、筆致の違いがやや判別しにくい、「末尾の追伸、日付と場所、そして署名」、大雑把に言えば、最後の3行分がゲーテの直筆とされる。天理図書館からは「資料来歴については返答できない」とのことで、鑑定書や領収書の有無も不明だが、収蔵時期については『天理図書館四十年史』¹⁴収録の年表に、「昭和14(1939)」3.31「林文庫」(林久男氏旧蔵、ゲーテ、シルレル [シラー] 等ドイツ著名詩人の書簡・草稿類) 約50点を収蔵」の記載がある、と御教示いただいた。この林久男(1882-1934、号は鷗南)は、長野県出身の独文学者で、1908年に東京帝国大学文学部独文科を卒業後、第七、第二高等学校を経て、第三高等学校教授に着任した。1922年、文部省在外研究員として渡欧、1924年に帰国しているの、この間にゲーテ自筆書簡を購入したのだろうか。ちな

みに林の専門は、ゲーテ研究ならびに演劇評論だった。

4. 関西の所蔵館 (2) 京都外国語大学付属図書館

京都外国語大学付属図書館の所蔵は、ゲーテの古くからの仕事仲間、「クリスティアン・ゴットロープ・フォン・フォイクト [Christian Gottlob Voigt; ただし以下実際の発音に近く定訳のフォークトと記す] 宛のゲーテの書簡」、ヴァイマルから1818年4月24日付の書簡一通のみ、と *Repertorium* にも記載されていた。印刷の初出は1904年、WA の第IV部第29巻、154頁。1961年の Stargardt のオークション・カタログに一部掲載されてから、10年以上を経た1972年刊行の京都外国語大学付属図書館カタログ『ゲーテ文献目録 *Goethe-Bibliographie*』(非売品)の最初の頁をモノクロ写真付でテキスト(和訳付)を含む主要データが飾った¹⁵。創立25周年当時の図書館長・森田嘉一教授は、英文学ではシェイクスピア、ディケンズ、ラフカディオ・ハーン、ドイツ文学ではゲーテ、シラーをはじめとする貴重書コレクション構築に尽力したひとりである。同学ゲーテ・コレクションの充実度について補足するならば、当時、同学で教鞭を執っていたのが、日本ゲーテ協会会長でゲーテの戯曲『ファウスト』の翻訳などでも知られる相良守峯(1895-1989)であったことも意味を持つ。というのも、当初からゲーテ研究で不可欠かつスタンダードなハンス・ピューリッツの分類に基づいてコレクション目録を作成するなど、専門研究者へのさりげない、しかしきめ細かな便宜が図られているからだ。近年では2017年の同学創立70周年を記念した稀観書展示会カタログ『世界の軌跡を未来の英知に 京都外大図書館の稀観資料』の30頁にも、当該書簡が美しいカラー印刷で掲載された。

しかしながら「貴殿の同意を得た同封の文書に従い、添付の通り、必要書類を作成したので、よろしくお取り計らいのほどを」という短いビジネスレターのはほとんどは、秘書クロイター (Friedrich Theodor David Kräuter, 1790-1856) が清書したものだ。敬称を用いてはいるが、気の置けない、長いつきあいの同僚相手なので、日付も場所も勝手を知る秘書に任せ、ゲーテは署名しかしていない。それでも念のため、2022年6月1日に調査に赴いた京都外国語大学付属図書館の閲覧室で待っていると、予想していたものとは別の、全く違う額装書簡が目前に現れた。日付は1816年4月19日付、同じフォークト宛ではあるが、すべて同じ調子の筆跡、つまりすべてゲーテ直筆に見える。解説したものを拙訳すると、以下の通り。

前略 [直訳では〈閣下〉の呼びかけ]、せっかくの貴家ご主催の夜会へのお招きは光栄ですが、今日は外に出ておりまして、やむを得ずの欠席をご寛恕下さい。

このところ大きな集まりはご遠慮させていただいており、徐々にまた慣らしていきたいと考えています。

今朝早く、拙宅の煤だらけだったオープンの掃除が上手くいったので、持ち家のある友人たちにこの方法を推奨させていただきます。草々

ゲーテが「閣下」と呼びかける人物は限られており、ここではフォークトが受取人である。事実、1816年4月18日付の書簡で、フォークトは外交官や大臣クラスの高官を集めた40人規模の「茶会」を計画、ゲーテも招待客のひとりに数えられていた。しかしゲーテは、4月上旬に気候の変化によるものか、数日、体調を崩して寝込んでいた。主君カール・アウグスト大公の重要な公式行事には、無理して出席したものの、依然、体調はすぐれなかったため、茶会を欠席したようだ。また後半のオープン [ないしは煙突] 掃除の件も、クロイターによる4月19日の日記に「食事が黒焦げになる」という記載があり、おそらく当時はさほど習慣化していなかった定期清掃をゲーテが友人・知人に勧めたということらしい。

実はこの書簡、2021年に刊行された『京都外国語大学付属図書館所蔵自筆書簡目録』12頁に「ゲーテの署名入り自筆書簡、閣下宛」と記載がある。同館の協力を得て、図書原簿を調査していただいた結果、東京の安土堂書店を介して、1982年7月に受入の記録が残っていた（金額は不明）。事実、1981年に刊行された増補改訂版『ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ 作品と参考文献 *Bibliotheca Goethiana*』（発行責任者は当時の館長・鈴木幸久教授）には掲載がない。以下は推測の域を出ないが、京都外国語大学がゲーテ・コレクション収集に力を入れていることを知る当時の書店担当者が、書簡購入に一役買ったと思われる。

早速、再び GSA のエックレ氏に資料情報を照会すると、予想通り、「すべてゲーテの直筆」と判明。しかもオリジナルの所在は、1965年にニューヨークで個人所蔵が確認されたものの、その後、「不明 *Verbleib unbekannt*」になっていた。しかもこの書簡、初出が WA ではなく、1963年刊行の『新シリーズゲーテ年鑑 *Goethe-Jahrbuch, Neue Folge*』第25巻であるのも興味深い¹⁶。ファクシミリ図版付きで行った新文献紹介の著者はエーベルハルト・ハウフェ、記事タイトルは「ゲーテのまだ知られていない書簡」である。ハウフェによれば、1963年時の所有者は、ニューヨーク在住のヨハネス・ウルツイディル名誉教授 (*Johannes Urzidil, 1896-1970*) で、1年前の1962年までは、ドイツ・フランクフルト出身、ニューヨークで亡くなったクレメンティーネ・クラマー女史 (1875-1962) の個人所蔵だった由。つまりドイツ・ヴァイマルから、ニューヨーク経由で京都に到達した書簡となる。京都外国語大学付属図書館調査時は、額装されていて確認できなかったが、ハウフェ

はウォーターマークも調べ、左上の付箋紙もどきは、先端に封蝋がついていた名残だと記している。

ハウフェに閲覧を許したウルツイディルは、現在のチェコ・プラハに生まれ育ち、プラハ大学を卒業した。青年時代からマックス・ブロートやフランツ・カフカとも交友のあった詩人だが、ゲーテ研究においては特に『ボヘミアのゲーテ *Goethe in Böhmen*』（初版1932年、改訂版1962年）の著者として知られる。1941年に渡米、文化史家およびジャーナリストとしても活躍したが、1970年、講演旅行中のローマで客死した。そして1973年、彼が所持していた当該ゲーテ書簡が、ドイツ・ベルリンにある Stargardt のオークション・カタログ84番にファクシミリ写真付きで載った。1990年刊行の WA 補巻にもテキストが収録される一方で、現在、京都外国語大学が所蔵する直筆書簡は、前所有者ウルツイディルの死後、半世紀近く、少なくともドイツ側からは「消息不明」だったことになる。

5. 関東のもうひとつの所蔵館 永青文庫

Repertorium によると——これから追加される本郷・東京大学総合図書館を除けば——、関東では目白台の永青文庫が唯一の所蔵館だった。この財団法人・永青文庫を設立したのは、「美術の殿様」と呼ばれる稀代のコレクターにして、旧熊本藩主細川家第16代当主の細川護立^{もりたつ} (1883-1970) である。所蔵するゲーテ書簡¹⁷は1814年12月13日付、すべて直筆で、受取人はこれまたフォークトである。

このゲーテ書簡が永青文庫に入ったきっかけは、細川護立の1926年2月から翌年7月までのパリを拠点にした欧州滞在である¹⁸。細川護立・博子夫妻は、1927年1月15日から欧州大周遊の旅に出ている。ブリュッセル、ハーグ、アムステルダムなどを訪問した後、1月22日夕方にベルリンに到着、29日まで滞在した。夫妻が逗留した老舗高級ホテル・アドロンの住所に、1927年1月27日付でベルリンの「ウンター・デン・リンデン *Unter den Linden*」12/13番地に店を構える書籍と芸術作品を専門とする古物商 *Buch- und Kunst-Antiquariat* 「ハインリッヒ・ティーデマン *Heinrich Tiedemann*」の担当者エッケルマン (*C. Eckelmann*) が差し出した英文ビジネスレターが残る。注文・取引の手始めに、さりげなく「幾つかドイツ人の直筆などもございますが *I have also some German autographs*」という1文がある。目論見は功を奏したのだろう、翌28日付で「本日、ゲーテとワーグナーの直筆書簡をご覧いただけますので *I can show you to-day an autograph letter by Goethe and Wagner*、お声がけいただければ幸いに存じます」と記された、もう1通のエッケルマンの書簡が残る。その後、バルト海を超えて北欧諸国を訪ねた夫妻は、2月8日夜、再びベルリンに投宿するが、12日夜にはオーストリア・ウィーンに発つ。この2月

のベルリン再訪で、ティーデマン古物商と注文の確定を行ったのだろうか、まずは1927年2月7日作成の請求書 Rechnung に、シラーやワーグナーと並んで「ゲーテの直筆 38英国ポンド」が計上されている。そして3日後の2月10日付で発行し直した請求書は、ベルリンのホテル宛ではなく、細川護立ら一行が最終的に戻る行動拠点、フランスの住まい「モンモラシー 9番地」宛で、値段の変更なしでゲーテの直筆がある他、ロマン派詩人ハイネ、音楽家ベートーヴェンやリストの直筆書簡など10点が加わり、計13点の長いリストになっている。現存する所蔵リストとリスト上の名前が一致することから、永青文庫のゲーテ書簡は、ベルリンで購入したものと考えて間違いないだろう。

他方、テキストの印刷公開は1868年で、『フォークト宛ゲーテ書簡集 *Goethes Briefe an Christian Gottlob von Voigt*』¹⁹に全文が初掲載されたが、編纂者オットー・ヤーン (1813-69) の控えをベースとしている。1901年のWAの第IV部第25巻 (S. 100f.) 刊行時には、「直筆正本の所在不明」のため、注に「同書簡集の編纂者ヤーンの控えから転載した」、所謂「孫引き」と記されている。オリジナルと比較して異なる点は、101頁4行目 (WA IV-25) がない auch が挿入されていることだが、テキスト解釈に影響はほとんどない。全文の拙訳は、以下の通り。

拝啓 丁寧なお礼とともに、お知らせのあった重要な急送公文書を拝受しました。各方面の理知的な殿方が一ひつの事柄を扱う様子を拝見するのは興味深いものです。その話題は歓迎するしかないでしょう。ミュラ

一氏は貴兄同様、私に幾つかの主要な新聞記事を読むよう指示してきました。状況は混乱していて、命令と権力でしか解決できないように思えます。とはいえ、朝に考えをめぐらしても、夕方にはもう状況が思いがけない方向に変わってしまっているかもしれません。

サルトリウス宮廷顧問官とお話しする機会を逸したのは残念でした。直接対面でお話しできれば、文章で書くよりもずっと多くのことが話せますから。

今回のイエーナ滞在には満足できそうです。博物館及び他に私の監督下にある施設等はこの上なくうまくいっていますし、将来的にはきっともっと有効活用できるでしょう。ほとんどの大学講師と話しました。いずれも教養ある思慮深い善良な紳士たちで、互いの価値を認めています。これでお互いを我慢できるとよいのですが。でもこれは人類史においても容易ではなさそうですから、この特殊な集団には期待しないでおきましょう。だからこそ閣下にはこれからも親しいおつきあいをお願いしたいものです。 敬具

イエーナ、1814年12月13日

終生イエーナ大学の監督官 (大学理事に相当) を務めていたゲーテは、特に自然科学研究に打ち込みたい時などは、隣町といえども、いちいちヴァイマルの自宅に戻らず、イエーナの常宿「緑の樅木亭」などに滞在するのが常だった。差出住所がイエーナになっているのはそのためである。文中にあるサルトリウス宮廷顧問官 (Georg Sartorius, 1827年に叙爵1765-1828) は、ザクセン＝ヴァイマル公国

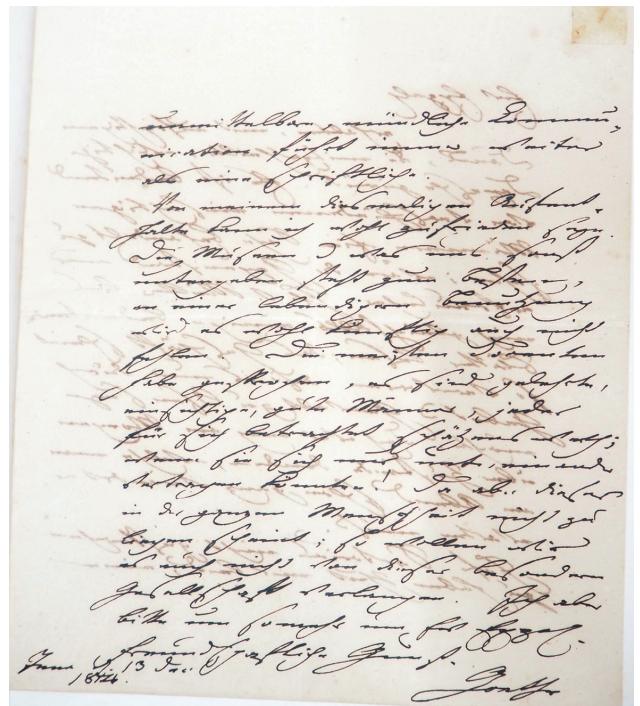
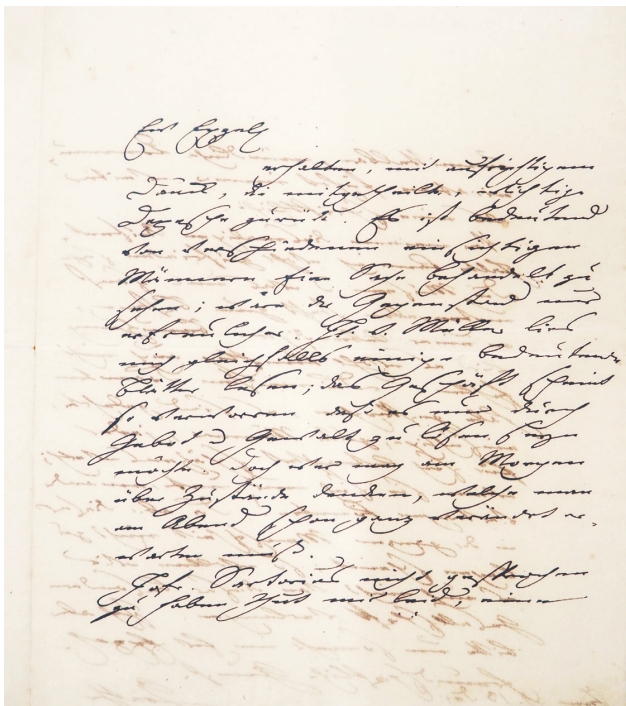


写真2・3 永青文庫所蔵のゲーテ自筆書簡 表(左)・裏(右) (筆者撮影・転載不可)

の政治顧問として、ウィーン会議に派遣されていた。前便でフォークトがウィーン会議に出席したサルトリウス宮廷顧問官の訪問を知らせ、一緒に話を聴こうとゲーテを招いたのだが、日程調整が上手くいかなかったようだ。また文中に登場するもうひとりの人物、國務長官ミュラー (Friedrich Theodor Adam Heinrich von Müller, 1779-1849) は、フォークトと同様、ゲーテの親しい仕事仲間のひとりである。

6. まとめと謝辞

以上が、2022年7月末までに確認できた日本国内におけるゲーテ直筆書簡の所蔵調査報告である。著者が直接調査したのは、天理図書館を除く計4通である。特に東京大学総合図書館は4半世紀行方不明だった書簡1通、また京都外国語大学は計2通、うち1通は半世紀近く消息不明だった書簡の所在が確認できた。他方、永青文庫については Repertorium が資料番号まで掲載しているのに対して、今回著者が問い合わせるまで、いつ誰がドイツ側からのアンケートに回答したのか、全く記録がなく、ゲーテ書簡の所蔵登録を認識していなかったという。こちらは1900年刊行のWAに転載があるとはいえ、直筆書簡そのものの確認は、約150年ぶりと言える。

手稿調査時には所蔵各館のみならず大変お世話になった。特に京都外国語大学附属図書館管理運営課長・宮杉浩様、同課・滝澤摩耶様、永青文庫主任学芸員・佐々木英理子様、そして本学附属図書館 (総合図書館) 情報サービス課・中村美里様のご理解とご協力に感謝申し上げます。

もしかすると日本のどこかで、まだゲーテ書簡が人知れず眠っているのかもしれない。昔の筆記体で書かれた書簡は、そもそも解読自体が難しい貴重資料だが、湿度管理や中性紙ボックスで保管するなど、ハード面での環境整備も重要である。手稿を所蔵している図書館・文書館および学芸員の方々とも連携しつつ、ヴァイマルでの『歴史的批判版ゲーテ書簡集』完成に向けて、日本からささやかなお手伝いができれば幸いである。

まだ印刷・公開されていないという。https://goethe-biographica.de/briefe/projektvorstellung.html (最終閲覧2022年11月)

⁵ Johann Wolfgang Goethe. *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hrsg. von Karl Richter u. a. 21 Bde. München (C. Hanser) 1985-98.

⁶ 以上、ここまでの各全集の特徴や刊行経緯については、*Johann Wolfgang Goethe, Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Frieder von Ammon, Jutta Eckle, Yvonne Pietsch und Elke Richter. Begründet von: Georg Kurscheidt, Norbert Oellers und Elke Richter. Weimar / Bonn (Akademie-Verlag) 2008, Bd.1の序文: Die Edition von Goethes Briefen S. I-XX を特に参考にした。

⁷ 2015年に開始されたライプツィヒの Sächsische Akademie der Wissenschaften zu Leipzig、マインツの Akademie der Wissenschaften und der Literatur そしてフランクフルト・アム・マインの FDH による準備プロジェクト。参照URL: https://ores.klassik-stiftung.de/ords/f?p=402:1:9996110452456 (最終閲覧2022年11月) この左バナーの「Standorte」をクリック、さらに Übersichtskarte を呼び出すと、世界地図上に所蔵館の分布状況がわかる。

⁸ Neue Mittheilungen aus Johann Wolfgang von Goethe's handschriftlichem Nachlasse im Auftrage der von Goethe'schen Familie. Hrsg. von F. Th. Bratranek. Theil 1, *Goethe's Naturwissenschaftliche Correspondenz 1812 - 1832*. Leipzig (Brockhaus) 1874.

⁹ 天理図書館編『天理図書館稀書目録 洋書之部 第一』、1941年、p. 50参照。

¹⁰ ただし本目録3行目の分綴は Ei/sen/ach が正しく、n が1つ余分。

¹¹ ゲーテの主君ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナッハ大公カール・アウグスト (Carl August, 1757-1828) にヘッセン＝ダルムシュタット公国から嫁した正妃 (Louise Auguste von Sachsen-Weimar, 1757-1830)。

¹² https://www.tcl.gr.jp/wp-content/uploads/meihin055.pdf (最終閲覧2022年11月) 参照。ただし本紹介記事の2段落目最後から「ゲーテが終生仕えたワイマール宮廷の大公婦人ゾフィーによって刊行された」の部分は、やや誤解を招きやすい表現のため、以下、補足しておく。「ゲーテがワイマール宮廷に終生仕えた」のは確かだが、彼の主君はカール・アウグスト公 (1815年以降大公昇格) で、その妻は同館が封筒のみ所蔵する377番の宛先、「ルイーゼ公妃 (封書の受け取り時点では大公妃)」である。これに対して「ゾフィー大公妃」は WA 編纂を命じた当人で、カール・アウグストの孫カール・アレクサンダーに嫁いだオランダ王女である。

¹³ 月刊『陽気』2011年07月 (養徳社) 掲載、天理図書館・福田由紀子著。URL は注12参照。

¹⁴ 天理図書館編『天理図書館四十年史』天理大学出版部、1975年。

¹⁵ 続いて1981年に刊行された同大学附属図書館冊子目録 *Bibliotheca Goethiana* にも、同書簡のファクシミリと所蔵データが見開きで掲載されている。

¹⁶ Haufe, Eberhard: Ein unbekannter Brief Goethes. In: *Goethe-Jahrbuch NF* (1963), S. 328-331.

¹⁷ 永青文庫の資料請求番号は3023 (他の欧州圏の作家・音楽家たちの直筆書簡と一緒に所蔵)

¹⁸ 林田龍太・舟串彩・十時桜編著: 永青文庫財団設立70周年記念目録『美の探究者 細川護立』永青文庫、2020年参照。特に「周遊五百二十日記抄」(細川護立ヨーロッパ旅程) p. 94-101参照。

¹⁹ *Goethes Briefe an Christian Gottlob von Voigt*. Hrsg. von Otto Jahn, Leipzig (Hirzel), 1868, S. 327f.

¹ *Goethes Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. Abtlg. I-IV. 133 Bände in 143 Teilen. Weimar (H. Böhlau) 1887-1919.

² *Goethe. Die Schriften zur Naturwissenschaft*. Im Auftrag der Deutschen Akademie der Naturforscher Leopoldina begründet von Karl Lothar Wolf und Wilhelm Troll. Hrsg. von Dorothea Kuhn, Wolf von Engelhardt, Irmgard Müller und Friedrich Steinle. Weimar, 1947-2019, 11 Text- und 18 Kommentarbände.

³ Nachträge und Register zur IV. Abteilung: Briefe / hrsg. von Paul Raabe. München (Dt. Taschenbuch-Verl.) 1990.

⁴ なお2021年の時点で、現存するゲーテ書簡の約5パーセントが、

Goethes Briefe in Japan: Eine Quellenprüfung

Aeka ISHIHARA

Zur Fortsetzung und zur Aktualisierung der vierten Abteilung der Weimarer Ausgabe, der Briefabteilung (WA IV), erscheint seit 2008 im Auftrag des Goethe- und Schiller-Archivs (GSA) eine neue Edition sämtlicher Briefe von Goethe: *Johann Wolfgang Goethe, Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*.

Heute sind mehr als 20.000 Briefe von Goethe bekannt. Sie liegen mehrheitlich in Deutschland, vor allem im GSA, im Goethe-Museum in Frankfurt am Main (FDH) sowie in Düsseldorf. Rund 200 Briefe sind auf der Welt, nicht nur in Europa und Amerika, sondern auch in Asien verstreut überliefert. Im „Repertorium der Goethe-Briefe“, einem Vorprojekt zu der neuen Ausgabe, sind die Standorte der Handschriften aufgeführt. Im Japan waren bis Januar 2022 an drei Stellen Briefe von Goethe bekannt.

Anlässlich der Wiederentdeckung eines weiteren Goethe-Briefes im Besitz der Universitätsbibliothek Tokio (The University of Tokyo, Hongo-Campus), also an einem vierten Standort, prüfte die Verfasserin die übrigen Bestände in Japan und die Geschichte von deren Überlieferung.

Neu entdeckt wurde der Brief von Goethe an L. W. Cramer (1755–1832) vom 29. Dezember 1822 im Besitz der Zentralbibliothek der Universität Tokio. Schlussformel und Unterschrift stammen von Goethe. Der Text wurde nach dem Konzept von Goethes Sekretär J. John im GSA (datiert auf den 28. Dezember 1822) 1874 in *Goethes Naturwissenschaftlicher Correspondenz* erstmals abgedruckt. Der Verbleib der Handschrift der Ausfertigung war unbekannt; 1996 konnte diesen Brief (mit einer Beurteilung vom damaligen Direktor des Goethe-Museums in Düsseldorf Prof. Dr. V. Hansen) ein japanischer Entomologe über eine deutsche Buchhandlung in Düsseldorf zum Preis von 9.500 DM erwerben. Dr. Shoji WADA lebte seit 1957 in Deutschland und arbeitete nach seiner Promotion (1964 in Würzburg) im Zoologischen Institut an der Universität Düsseldorf. Über seine Nichte, Frau SHONO, wurde dieser Brief,

dem Vermächtnis ihres Onkels entsprechend, der UB Tokio geschenkt.

In der Tenri-Bibliothek (Zentralbibliothek der Tenri-Universität) in Nara ist die Autopsie der Handschriften nicht gestattet. Nach Auskunft der Bibliothek besitzt sie einen von Goethe adressierten Umschlag an die Großherzogin Louise von Sachsen-Weimar-Eisenach (ohne Inhalt) und einen Goethe-Brief vom 26. April 1807 an Prof. H. C. A. Eichstädt (Philologe und Herausgeber der *Jenaischen Allgemeinen Literatur-Zeitung*, 1772–1848) in Jena. Dieser Brief war angeblich im Nachlass von Prof. Hisao HAYASHI (1882–1934) zu finden, der als Germanist zwischen 1922 und 1924 durch Europa gereist war.

Die Bibliothek der Hochschule für Fremdsprachen Kioto (Kyoto University of Foreign Studies), die sich eines guten Rufs wegen ihrer Goethe-Sammlung (*Bibliotheca Goethiana*) erfreut, besitzt einen längst bekannten Brief vom 24. April 1814 an Ch. G. Voigt (Goethes Amtskollege in mehreren Kommissionen, 1743–1819, seit 1807 geadelt) mit Goethes eigenhändiger Unterschrift. Hier wurde auch noch ein weiterer eigenhändiger Brief an Voigt vom 19. April 1816 wiederentdeckt. Dessen Verbleib war seit 1973, nach dem Tod des letzten Besitzers, unbekannt, aber die Hochschule für Fremdsprachen Kioto konnte ihn dem Vernehmen nach 1982 über eine Buchhandlung in Tokio erwerben.

Einen weiteren Goethe-Brief an Voigt, und zwar denjenigen vom 13. Dezember 1814, besitzt das Eisei-Bunko (Eisei-Archiv bzw. Museum) in Tokio. Dessen Begründer, Marquis Moritatsu HOSOKAWA (1883–1970, genannt „Fürst der schönen Künste“, stammt aus der ehemaligen Fürstenfamilie des Kumamoto-Klans und war als Politiker tätig. Er ist auch als Forscher und Sammler von Altertümern bekannt und hat zur Förderung der akademischen Forschung beigetragen. Seine Sammlung ist als Eisei-Bunko bekannt, wogegen die kleine Autografen-Sammlung darin völlig in Vergessenheit geraten war. Hosokawa hat während seiner Grand-Tour in Europa (1926–1927) über ein Antiquariat in Berlin

mehrere Autografen von europäischen Schriftstellern, Komponisten usw. erworben und auch dieses Stück von Goethe für 38 Englische Pfund angekauft. Der Text ist nach dem Konzept längst bekannt und gedruckt. Die Ausfertigung selbst konnte bislang noch nicht vor Ort geprüft werden.

Hiermit sind fünf originale Briefe und ein Umschlag von Goethe an vier Orten in Japan bestätigt.